

# Economic Indicators

定例経済指標レポート

指標名: 国際収支(2008年12月)  
 ~ 今後は経常赤字の可能性も ~

発表日 2009年2月9日(月)

第一生命経済研究所 経済調査部  
 担当 エコノミスト 岩田 陽之助  
 TEL : 03-5221-4525

		原数値 経常収支					季調値 経常収支				
		貿易・サービス収支				所得収支	貿易・サービス収支				所得収支
			貿易収支	サービス収支				貿易収支	サービス収支		
		前年比	前年比	前年比	前年差	前年比	前期比	前期比	前期比	前期差	前期比
07	9月	42.5	77.1	59.9	378	16.0	2.3	▲12.9	▲17.7	924	17.0
	10月	44.2	97.6	50.4	385	21.8	10.4	17.4	14.7	49	2.7
	11月	▲2.3	▲16.8	▲12.1	▲343	15.2	▲18.1	▲23.9	▲13.5	▲962	▲11.3
	12月	▲10.8	▲33.0	▲18.2	▲1164	19.4	▲13.9	▲49.0	▲33.3	▲545	10.8
08	1月	1.8	赤字	▲36.9	▲34	7.2	13.8	93.6	49.7	448	▲9.2
	2月	4.8	▲9.2	▲7.0	▲168	14.3	▲24.2	▲72.0	▲54.8	▲96	5.6
	3月	▲11.7	▲33.3	▲29.3	▲788	6.6	40.3	148.5	64.0	346	12.5
	4月	▲29.4	▲59.1	▲41.9	1347	▲17.1	▲27.4	▲11.0	▲16.3	655	▲27.1
	5月	▲6.8	16.2	▲0.1	687	▲12.5	31.2	44.2	27.5	438	20.4
	6月	▲68.9	▲99.8	▲81.5	▲440	25.1	▲36.7	赤字	▲85.4	▲1259	9.3
	7月	▲17.3	▲93.5	▲69.8	1133	9.6	25.8	-	241.0	951	▲1.6
	8月	▲52.5	赤字	赤字	1004	▲5.1	▲39.2	赤字	赤字	184	▲10.0
	9月	▲48.8	▲94.0	▲86.0	92	4.7	6.1	赤字	-	▲566	▲1.2
	10月	▲56.5	赤字	▲87.2	122	▲16.3	7.9	赤字	-	392	▲3.3
	11月	▲65.9	赤字	赤字	233	▲15.5	▲41.2	赤字	-	▲374	0.6
	12月	▲92.1	赤字	赤字	▲118	▲27.8	▲23.8	赤字	-	▲1458	▲17.8

(出所) 財務省「国際収支状況」

## ○12月の経常黒字額は前年比▲92.1%

12月の経常黒字額は前年比▲92.1%の1,254億円(原数値)とコンセンサス(同3,200億円、レンジ1,506億円~8,250億円)を下振れる結果となった。所得収支については、配当金や債券利子等の受取減少から、「証券投資収益」「直接投資収益」の黒字幅が縮小し、全体として黒字幅が縮小した。貿易収支をみると、輸入は国内の需要低迷や原材料価格の下落により前月からマイナス幅が拡大したものの、世界経済の悪化により輸出が▲35.1%と輸入以上に減少したことから、貿易収支は2ヶ月連続の赤字となった。これらを主因として、経常黒字は10ヶ月連続での前年割れとなり、そのマイナス幅も拡大傾向にある。

## ○貿易収支2ヶ月連続で赤字

貿易収支は▲1,979億円と2ヶ月連続の赤字となった。個別に見ると、輸入は、原油の価格下落に加え生産調整の本格化などから、前年比▲21.2%(前月同▲13.7%)となった。一方、輸出は前年比▲35.1%(前月同▲26.5%)とマイナス幅が拡大した。欧米の景気後退が新興国などにも波及し、各国の需要が低迷していることに加え、生産調整の本格化からアジアなどの海外現地工場への輸出が減少したためと考えられる。輸入の減少幅を輸出の減少幅が上回り、貿易収支は2ヶ月連続での赤字となった。

サービス収支は、▲3,217億円と赤字幅が拡大した。主に、「輸送」において赤字幅が拡大した。

所得収支の黒字額は、7,242億円(前年比▲27.8%)と黒字幅が大きく縮小した。「直接投資収益」に関しては、海外子会社の業績悪化から配当金の受取などが減少し、「証券投資収益」においては、金利の低下や円

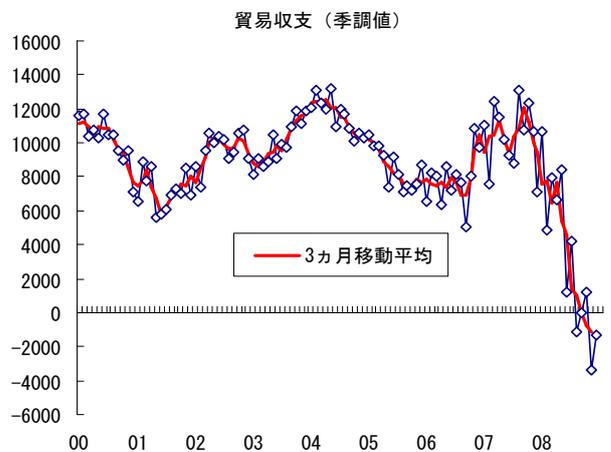
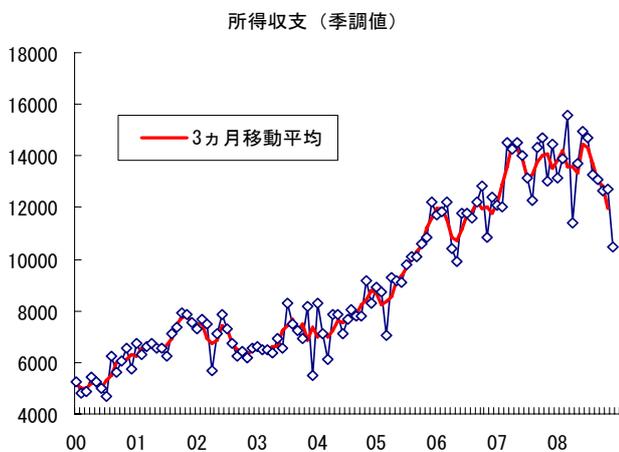
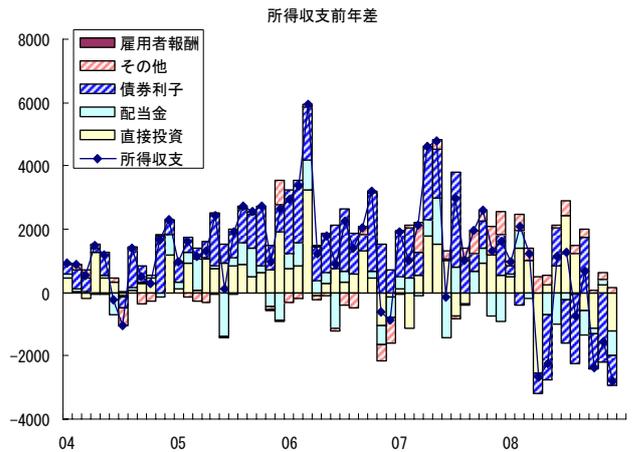
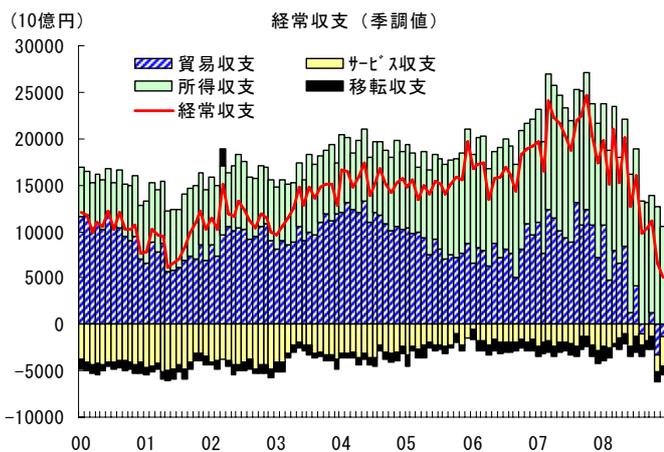
高の進行などから、配当金や債券利子の受取額が減少した。今回経常収支の黒字額はコンセンサスを下振れたが、貿易収支が既に発表されている貿易統計とほぼ同じ動きをすることから、予想との乖離はこの所得収支の黒字幅縮小が主因と考えられる。

### ○経常赤字に転落する可能性が高い

経常収支の先行きを展望すると、まず所得収支については海外子会社の収益悪化、円高の持続から今後も黒字幅の縮小は継続するものと考えられる。

次に、貿易収支は足元2ヶ月連続の赤字となっているが、今後も低調に推移する可能性が高い。たしかに、輸入は国内の需要減少や原材料価格の低下などにより減少している。もっとも、輸出の減少速度はそれを上回っており、今後も持続するものと考えられる。輸出減少の主因は、欧米の景気後退による需要減少が輸出依存度の高い新興国に波及し、世界的な規模での景気後退が進んでいることにある。各国で、金融緩和、財政政策など景気回復に向けた対策が打たれているが、具体的な効果はまだ見出しがたい。輸出に先行するOECD景気先行指数も引き続き悪化しており、世界的な景気後退が続く中、輸出は先進国向け、新興国向け共に低調に推移するだろう。その他の項目に関しても、黒字幅拡大に向けた積極的な要因は見出しがたく、経常黒字の大幅な縮小は今後も継続されるものとする。

貿易統計によれば1月の上中旬の輸出は前年比▲46.1%と大幅に落ち込んでいる。1月は1年の中でも貿易黒字が小さい月であることを踏まえると、1月の経常収支は赤字に転落する可能性が高いだろう。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。